

2017 中国・北京のカメラショー

2017 CHINA P&E Report

市川 泰憲

Yasunori ICHIKAWA

Author JCII Camera Museum Steeringcommittie member

中国のカメラショーともいえる「CHINA P&E」が去る4月21日～24日まで北京の「ナショナルコンベンションセンター」で開催されたので、中国の写真事情と日本企業の動向はどのようなものかと視察してきた。

中国ではCHINA P&Eを、ドイツのPhotokina、日本のCP+と並ぶ世界の3大写真映像ショーとして位置づけている。Pは写真、Eは電子映像の略で、1998年から開催され今年で20回目となる。開催場所は、2008年の北京オリンピックが開かれたオリンピック公園地域で、近くには開会式に使われた鳥の巣と呼ばれる「北京国家体育場」があり、幅広い道路ときれいな公園がある場所に位置している。

「2017 CHINA P&E」には、開催初日の21日と翌22日の2日間にわたって終日会場にいて、各社ブースを見て回った。初日は、北京には珍しいという青空だったが、現地の事情になれないことから、会場に到着したのがオープンの時間から10分ほど経過したタイミングで、会場受付には多くの観客が入場登録に並んでいた。

入場は無料だが、われわれは事前に入場登録をしておいたので、登録番号を見せることにより、素早く入場パスを受け取ることができた。あとで気づいたことだが、初日は9:30よりオープニン



北京オリンピック公園地域の施設（赤矢印が開催場所）



開催にあたってのWeb ページ表紙。世界の3大写真ショーはドイツ、中国、日本



会場となった中国ナショナルコンベンションセンター。ちょうど団体客が整列して記念写真を撮っていた。建物はこちらに見える6倍ぐらいの横幅がある



入場登録に並ぶ人々（1）



入場登録に並ぶ人々（2）

グセレモニーが行われ、要人の挨拶の後、10:00にテープカットして入場というあたりは、ほとんど日本のCP+と同じで、建物がパシフィコ横浜と近似した構造をしているから、登録場所、入場の仕方など同様であるために特別に違和感はない。

ただし日本と異なるのは、会場に入場するときはセキュリティーチェックを必ず受けなくてはならず、手荷物のX線検査、金属探知機によるボディチェックが行われる。このあたりはアメリカでのCES、ドイツのフォトキナ、フランスのサロン・ド・ラ・フォトでもここ数年来行われていることなので、特に驚くことではない。

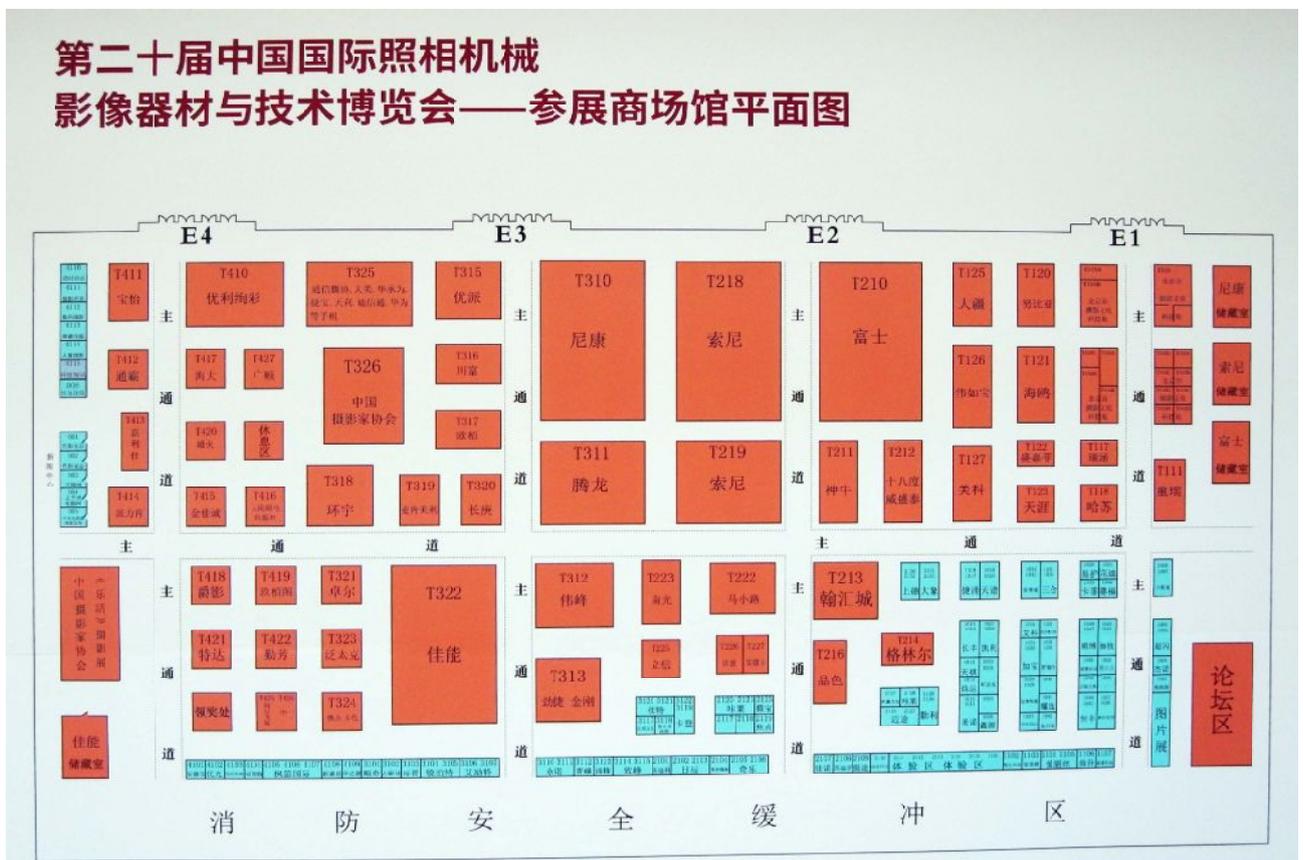
下には展示ブースの平面図を示した。大きな面積を占めているのは日本企業で、キヤノン（佳



筆者の入場パス。所属と名前とバーコードが印字されていて、入場のたびにバーコードを読み取られる

能)、ニコン (尼康)、ソニー (索尼)、富士フィルム (富士)、ベルボン (金鐘)、タムロン (T311)、エプソン (T410) などが、現地法人を通じて独立したブースをだして、カメラに関しては事実上日本企業の独占状態である。去年はシグマ、ケンコー・トキナーなども出展していたようだが、

第二十届中国国际照相机机械 影像器材与技术博览会——参展商场馆平面图



「2017 CHINA P&E」会場ブース配置平面図。面積は22,000㎡。大きなブース面積をとっているのが日本企業だ



④タムロンのブースは比較のおとなしい作りだ



④タムロン 鯨坂司郎社長と④ニコン 御給伸好映像事業部長

今年は見えない。

また、2015年ごろまでは、韓国のサムスン、中国のカメラ製造企業も出展していたのだろうと考えるが、世界的にコンパクトデジタルカメラの多くが、スマートフォンに置き換わったことと、出展企業数の変化は無関係ではないだろう。

今回はそのような状況の変化が一段落したなかで、改めて中国における日本企業の動向、中国カメラユーザーの志向、さらには最近日本のCP+に数年前から出展している中国レンズメーカーの動きなどを注視していこうと考えた。

■日本企業の動き

まず会場に足を踏み入れて、最初に目についたのがタムロンブースだ。ちょうど開館してからまだ時間がさほど経過していないことから、タムロンの鯨坂司郎社長に偶然お会いして話しをしていると、ニコンの御給伸好映像事業部長以下7人が会場を巡回されてきた。

タムロンもニコンも中国に製造工場を持っていることはよく知られているが、責任者自らがオープニング時に顔をだすということは、中国市場を重視しているであることは想像に難くない。

■タムロン

タムロンのブースは、前面に大型ディスプレイによる動画とステージでのトーク、奥にモデルを



ニコンのブースは、木目調の塀で囲み空間を作っていた



ニコンブースに入るとものすごい人数の観客に圧倒された



カメラ、レンズ清掃サービスだろうか、人気だ

配置というように日本でのブースに比べると少しおとなしい。商品としては、SP70-200mmF2.8 DiVC USD G2、単焦点のSP85mmF1.8 DiVC USD などと日本と大きく変わる部分はない。ちなみに中国語の繁体文字でタムロンと書かれていると日本語フォントにはないので片仮名か欧文表記になる。

■ニコン

ニコンは、今年2017年が創立100周年になることから、ブース壁面には記念のロゴを張り出し、木目調の塀で囲っていたのが印象的だ。

まずはなかに入ろうとして驚いたのは、人垣でなかなか進めないのだ。どうにか入ると、会場中央に白い棒が立っていて、白人女性がポールダンスをやっていた。観客はその周りに三脚を立てた



キャノンのブース



ソニーα9の大型スクリーンを使ったレクチャー



キャノンの超望遠レンズ体験コーナー



コートの中ではバスケの模擬試合が行われていた



男女で入れ替わり行われていたEOS M6のトーク

りして人垣を作っていて静かに撮影しているが、日本のように殺気立った雰囲気はなく、おとなしい感じだ。写真はその場面を示しているが、中央左の白いポールにはNikonの文字が見えるのは、おわかりいただけるだろうか。

製品としては、フルサイズデジタル一眼レフカメラD5、APS-CのD500の高感度での4K動画撮影をアピールしたり、超望遠レンズコーナーを設け、プロがカメラを構えた写真とメッセージの掲示などが目につく。製品の解説に加え、まずは集客をとった中国市場ならではの手法なのだろう。

■キャノン

キャノンは、今年で一眼レフのEOSシステムが登場して30周年であり、中国キャノンができて20

年にあたるそうだ。階段上ステージに設置した超望遠レンズをのぞかせたり、インストラクターによる製品解説を採り入れているのは世界共通の展示スタイルといえるが、カウンター越しに対応するようなコーナーも設けられている。

この時期の新製品としてはEOS M5、M6といったところだろうが、ステージでのインストラクターの解説も熱が入っている。

キャノンのステージのわきにおいて気づいたのだが、小さな受付カウンターにスマホ画面を見せて、何やらノベルティーを受け取っていく人たちが目についた。たぶん事前登録してあるのだろうが、キャノンのブースだけでなく、若い人たちが、支払いを含めてスマホで登録・確認を行っているような場面をあちらこちらで目撃した。

■ソニー

ソニーの展示スタイルも日本とほとんど変わらない。今回の展示で、もっとも注目したのはここ中国でソニーは最大のブース面積608㎡を確保したのだ。実は、今年の2月に開かれた日本のCP+でも最大のブース数100コマをソニーは確保していた。

このときは会場内にバスケットボールコートを作って、プレイを当時の最新型一眼レフα99Ⅱのフルサイズ4,240万画素で12コマ/秒という速度で撮影するのを見せつけたが、CHINA P&Eでは、オープン当日の21日に発表したフルサイズミラー



手前に各種デジタルカメラが並び、モデル撮影は、正面2カ所と右側にGFXスタジオとして3カ所設けられている



富士フィルムブースのメイン撮影コーナーは人気だ



3カ所設けられたGFXスタジオ。順番を待てば、申し込み順にゆったりとしたスペースで撮影させてくれる



ポラロイド190カメラの後ろにアダプターを介してGFXを取り付けて展示されていた。不思議な組み合わせだ

レスで2,420万画素のメモリー内蔵積層型CMOSを搭載した20コマ/秒のα9と超望遠ズームFE100～400mmF4.5-5.6GM OSSにすべてを注ぎ込んだブース作りだ。ステージでインストラクターによるレクチャー、特設バスケットコートでは試合を行い、初日午後1時から届いたばかりのα9と望遠ズームを複数セット貸し出して試合を実写させてくれ、バスケット試合の休憩時間にはチアガール5人がコートで演技するという徹底ぶりだ。

ところで、中国におけるソニーの人気はどののだろうか。少なくとも、この会場でカメラを手に

して歩いている男性達は日本より少し年齢が高く、いわゆる定年後の富裕層といった印象を受けたが、そのほとんどの人たちの手には、ニコン、キヤノンのフルサイズ機がしっかりと手に握られていた。中国におけるソニーのシェアというかミラーレス一眼は、まだこれからというところだろうか。

ナショナルコンベンションセンター正面入り口上の大きな看板、展示会での最大ブース面積の確保など、将来に対する先行投資を見せつけられた。ソニーは、今後はヨーロッパと同様に中国を大きく伸びる市場と位置づけているのだろう。

■富士フィルム

富士フィルムは、本年2月28日に発売されたばかりのGFXに、ほとんどのエネルギーを注ぎ込んでいた。もちろん、コンパクト機からAPS-C機まで全製品を展示していたが、正面ステージには花輪のブランコに乗ったモデルと、立ったモデルを配するなどして、一般ユーザーのポートレート撮影マニアにはかなりの人気だった。GFXのためには商品展示に加え、会場わきにGFXスタジオというのを3カ所も設け、大型ストロボ、大型モニターを使い、撮影の実演をするなど力が入っていた。

こちらの事情に詳しい人によれば、中国でカメラはある程度大きいほうが好まれるとのことで、



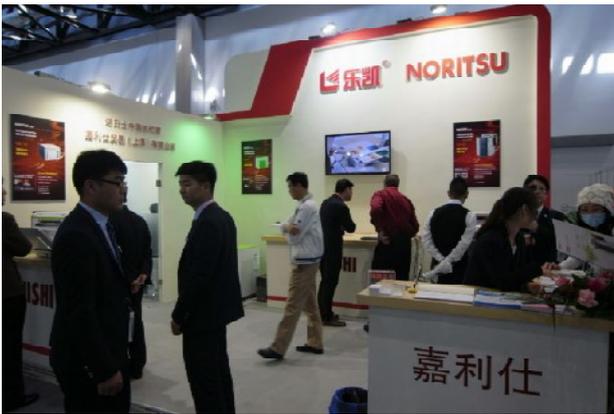
バスケットコートの中でソニーα9と超望遠ズームのFE100～400mmF4.5-5.6でシュートの瞬間を試写させてもらった



日本と大きく変わらない作りのベルボンのブース



エプソンのブース



中国ラッキーフィルムとノーリツ鋼機を扱ったブース

その点において適度な大きさと重さの中判ミラーレス機であるGFXは、中国のプロ写真家、富裕層に向けたカメラとして位置づけられたのだろう。これからの進展を知りたいところだ。

なお富士フィルムは、CHINA P&E 開催直前の4月19日に、スクエアサイズのチェキプリンターを内蔵したデジタルカメラ「instax SQUARE SQ10」を発表していたが、こちらで手にすることができるだろうと臨んだが展示されなかった。

■ベルボン

三脚メーカーであるベルボンは日本の用品メーカーとしては唯一の出展である。ブースの作りは日本と大きくは変わっていない。ベルボンと中国との結びつきは古く、26年前の1991年に工場を中国へ設立している。実は、中国はたぶん三脚メーカーが世界で一番多い国だと認識しているが、そのような環境でよく頑張っていると思う。

そして、ベルボンは2016年にはミャンマーに工場を新設している。今後、中国とミャンマーの製造比率をどのように分けていくのだろうか。

■エプソン

エプソンは、独立したブースをだしている。出展者リストを見るとエプソン中国となっている。中国の市場もデジタルになっていて、インクジェットプリンターの需要は業務用、個人用を含

めマーケットは大きいと思うが、展示されているのは業務用だけだ。個人ではプリントするようなことはあまりないのだろうか。その点において、会場を見回してみるとインクジェット用のペーパーの出展が少ないようだ。日本では、中国製のインクジェット用紙が販売されているのを複数見るが、こちらではイルフォードIJペーパーの展示を見ることはできたが、独自にインクジェットペーパーを展示する企業はないのだろうか。

NORITSUというロゴを見つけ、日本のノーリツ鋼機であることはすぐに分かったが、よく見ると左に別のロゴがついている。あれこれと考え思い出したのは、**中国楽凱集团公司**（中国ラッキーグループ）のマークであることがわかった。

正しくは中国楽凱膠片集团公司（中国ラッキーフィルム、www.luckyfilm.com）と社名にフィルムが入っているが、2011年に中国航天集団の傘下となり、2012年にはカラーフィルムの製造から撤退している。現在では黑白フィルム、医療用、印刷用などの感材製造は続けているようだが、主流は液晶用の偏光フィルターなど、高機能光学フィルムの製造などへと質・量ともに転換している。いずれにしても日本でラボ機器を製造するノーリツ鋼機と中国のラッキーフィルムを扱う商社がブースをだしているわけだ。

■海外企業のブース

広い会場内で、日本企業以外に独立した海外企業ブースを見るのは、数が少ないだけに難しい。それでも数社は見つけることができた。

■カールツァイス

ドイツのカールツァイスは、一眼レフ、ミラーレス用の交換レンズに加え、双眼鏡、スマートフォン用コンバージョンレンズなど、一通りの製品を並べているが、決して大きいとはいえないが、必要十分な展示スペースなのだろう。

ブースには、カールツァイスジャパンのスタッ



Carl Zeiss社のブース



Irix社のカウンター



Hasselblad社のブース



韓国のサムヤン（三洋光学）は直接ブースをだしてなく、ロモグラフィと同じ販売代理店のブースに飾られていた

フも詰めていた。

■ハッセルブラッド社

スウェーデンのハッセルブラッド社は1841年創業だが、2017年初頭に中国の大手ドローンメーカーであるDJIに買収されたというニュースが流れ、2月に開かれた日本のCP+においても、DJIのドローンにハッセルブラッドH6D-100cが実装展示されるなど話題を呼んだ。そこで、ハッセルブラッドを中国企業とするべきか決めかねたが、CHINA P&Eでは、それぞれがまったく個別にブースをだしていたので、独立した海外企業として見た。

このほか、ペリカン（PELICAN PRODUCTS, INC）のバッグを展示したコーナーも見つけることもできた。このあたりは確認はとっていないが製造は中国で行われているのではないだろうかと思った。

■Irix社

2016年11月にパリで行われたサロン・ド・ラ・フォトで初めて知ったレンズメーカーだ。今回はどこかの販売店を間借りしてテーブルぐらいのショーケースで出展していた。

そもそもスイスの企業（irixlens.com）がデザインして、中国で製造したということになっていた。スイスという地にレンズメーカーの必然性が見えなかったが、北京に来てその実態が判明した。いまや世界で第3位ともいわれる韓国のレンズ

メーカーであるサムヤンが投資ファンドに売却され、サムヤンには2015年でカメラから撤退した韓国のサムスのカメラ技術者たちが入ってきて、外に出た元サムヤン技術者たちが新たに作ったのがIrixブランドの交換レンズというのだ。現在、11mm F4と15mm F2.4をだしている。デザインは類似しているが、洗練されている。

この時期から日本でも通信販売で販売開始しようだが、Facebook広告ページで、日本の購入者が販売会社に「コシナのレンズですか」と聞いたら、韓国の会社だと答えていた。

■中国のカメラとレンズメーカー

中国のカメラメーカーはどうだろう。冒頭では、カメラに関しては事実上日本企業の独占状態と書いたが、実は気になるメーカーとしては、海鷗（シーガル）を作っていた上海照相机がある。

■シーガルデジタルカメラ社

上海照相机は1949年の創業で、かつてフィルムカメラ全盛のときはスプリングカメラと二眼レフ、一眼レフのシーガルカメラが製造していて、日本にもかなりの数が輸入されていた。さらには、バルナック型ライカの上海58-I型、58-II型、M型の紅旗を製造するなど、歴史ある名門のカメラメーカーであったが、現在はどのようなだろうと気



上海シーガルデジタルカメラ社のブース



二眼レフ方型デジタルカメラ「シーガルCM9s」

になる部分だ。

会場を見て歩くと、見つけることはできたが、今回の展示では主力製品を“3Dプリンター”にしているようで、ブースの前を通るとかつてのロゴはそのままでも、カメラがどこに置いてあるか探さなくてはわからなかった。社名も、Shanghai Seagull Digital Camera Co., Ltd (www.seagull-digital.com) となっており、すっかりフィルムカメラ製造の事業が終息していることがわかる。

それでもブースカウンターをよく見ると、二眼レフ型のデジタルカメラ「CM9s」が1台置いてある。このカメラはかつての二眼レフの復刻版だそうで、1200万画素COMS、5.2～17.7mmF1.4-2.3 (35mm判29～90mm相当) のレンズが搭載されていて、撮影はフィルム用二眼レフと同じように、上蓋を開いて上からお辞儀スタイルで撮影できる。このカメラ特筆すべきは、二眼レフ的なボディの上のレンズと下のレンズから画像を投影できる仕掛けになっている。上のレンズを使うと家庭など小画面で、下のレンズを使うと会議室で使えるというデジタルプロジェクター内蔵のカメラだ。

また、25～600mm相当24倍ズーム搭載のコンパクトデジタル機「CK-101」、1200画素「全天候型監視カメラ」、4K・3.0m防水のアクションカメラ「SeeGo1」などがあるが、現在の主力製品は「3Dプ



2016フォトキナで発表された中国Yi Technology (シャオイテクノロジー) 社のM4/3規格のミラーレス機「Yi M1」は立て看板は見つけることができたが、ブースはなかった



中一光学のブース

リンター」のようだ。かつては、相当量のフィルムカメラを製造していた上海海鷗照相机だが、社名にデジタルを入れてみたが、本質的な転換は図れたのであろうか。

■中一光学 (Shenyang Zhongyi Technology)

中一光学 (www.zy-optics.com) は、すでに日本のCP+に、2016年から展示していて、Speedmaster 25mm F0.95 (M4/3)、Speedmaster 35mm F0.95 II (APS-C)、Speedmaster 50mm F0.95 (フルサイズ)、Speedmaster 85mm F1.2 (フルサイズ)、Speedmaster 135mm F1.4 (フルサイズ) など、大口径レンズを中心に交換レンズを展開してきたが、近年は20mmF2の4～4.5の拡大マクロレンズ (フルサイズ)、フルサイズF2クラスのスタンダードタイプもラインアップしている。

今回は副社長からお話を聞くことができた、中一光学は瀋陽にあり、1984年に日本の三竹光学との中日合弁会社としてスタートし、中国製一眼レフPHENIX (鳳凰) などのレンズを手がけたレンズメーカーで、2002年に三竹光学の社長がなくなり、2人の娘さんが跡を継ぐ意思がないということで、Mitakonというブランドを含めて2004年に中国側で全面的に引き取り今日に至っている。

社長は徐忠一氏で、中一光学は社長の名前からとっているとのことだ。年間20,000本ほどの交換



ラオワのブース



ヨンノウ社のブース



ラオア交換レンズのカットモデル。㊦15mmF4 ワイドマクロ。㊦105mmF2STF（後ろから4枚目がアポダイゼーションフィルター）

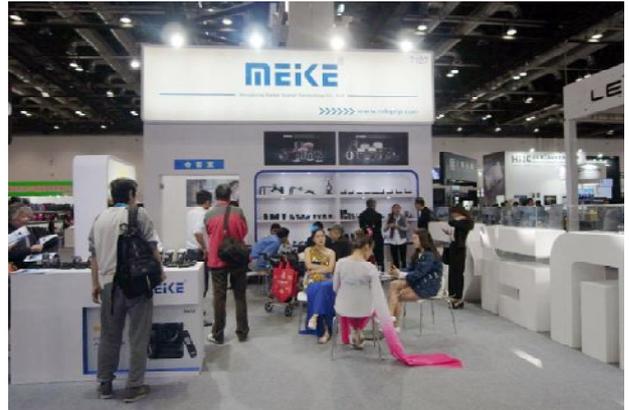
レンズを製造しており、特徴のある隙間的な交換レンズを製造することを目指しているという。そういうレンズがあったらぜひ教えて欲しいと、逆に聞かれる始末だ。この時期には、富士GFXマウントの65mmF1.4、ソニーFEマウントのフルサイズ24mmF2.0を新製品として登場させている。

市場としては、日本がかなり重要視されていて、この時期最新のA4判カタログでは、日本の商業写真家HASEO氏がほとんどの作例写真をモデルと花を撮影し、日本の販売代理店である焦点工房社長の陸孜豪氏が撮影した、富士山の写真を掲載するなど、親日感を盛り上げている。

■ラオワ (LAOWA、老蛙)

やはりユニークなレンズ作りを心がける、安徽省のAnhui Changgeng Optics Technology Co., Ltd (Venus Optics、www.laowalens.net) の交換レンズ商品名が「ラオワ」なのだ。この会社は2013年の創立だというのが、光学設計チームは日本とドイツ向けの設計に20年以上の経験があるという。日本のCP+には2016年から出展している。

ラオアのレンズは何がユニークかという、まるで腹腔鏡のような一眼レフ交換レンズ24mmF14リレー×2マクロ（フルサイズ、未発売）、12mmF2.8ゼロD（フルサイズ）、ボケ具合をきれいにするアポダイズドフィルターを組み込んだ105mmF2



香港MEIKE デジタルテクノロジー社のブース

(T3.2)STF（フルサイズ）、15mmF4シフト（フルサイズ）、60mmF2.8ウルトラマクロ×2（フルサイズ）、7.5mmF2（M4/3）などをだしていることだ。105mmF2(T3.2)STF(Pat No.CN104991330A)などの特徴あるレンズは、中国特許が出願されている。

■ヨンノウ (YONGNUO)

YONGNUOと綴り、ヨンノウと読み、‘永遠の約束’という意味だそう（http://hkyongnuo.com/）。もともとは、ストロボを得意とする企業であったが、最近では交換レンズを徐々にではあるが、増やしてきている。すでに日本でもCP+2017に出展している、ご存知の方もいるだろう。

ヨンノウレンズの特筆すべき個所は、外観がかなりキヤノンと似ていることに加え、それぞれがAF対応であることだ。交換レンズには、YN35mmF2、YN50mmF1.8があり、それぞれキヤノン、ニコン用が用意されている。またYN85mmF1.8、YN100mmF2のキヤノン用がある。このほかキヤノン用の電子連動1.4倍のテレコンバーターなどもある。

いずれにしても、外観、AF対応のことなどの権利関係に関しては、専門外のわれわれにとってはまったくわからない部分である。

■香港MEIKE デジタルテクノロジー社

香港に本社を構え、内陸に工場を持つのは中国企業のひとつのスタイルのようだ。香港MEIKEデ



かつてのタクマーレンズをほうふつとさせる



香港 MEIKE デジタルテクノロジー社の交換レンズラインアップ



長春 Richen Optronics 社のブース



長春 Kaili Optronics 社のブース

デジタルテクノロジー社 (www.mkgrip.com) もそのよう
で、オフィスは広東省の深センにある。この会
社の存在を2016年のフォトキナで知ったが、半年
後の今回には、交換レンズをかなり拡充している。

その交換レンズはいずれも MF でミラーレス用
MK6.5mm F2 魚眼、一眼レフ用 MK8mm F3.5 魚眼、ミ
ラーレス用 MK8mm F3.5 魚眼、APS-C 用に MK12mm
F2.8、MK50mm F2、MK28mm F2.8、MK35mm F1.7 など
があり、この時期はミラーレス用の 25mm F0.95 が
新製品のようなが、詳細は不明。このうち APS-C
一眼レフ用の MK50mm F2 などのレンズは、鏡胴部
分がアルミ金属で、かつての旭光学のタクマーレ
ンズのデザインをほうふつとさせるものがある。

MEIKE には他に、ストロボ、ワイヤレスリモコ
ン、LED 照明器具などがあるが、さらにソニー α ミ
ラーレス用、キヤノン EOS M、EF/EF-S、ニコン一
眼レフ用、ニコンミラーレス用、オリンパス・パ
ナソニックの M4/3 用、富士フィルムミラーレス用
に、AF が働くマクロ中間リングもだしている。

■その他の光学メーカー

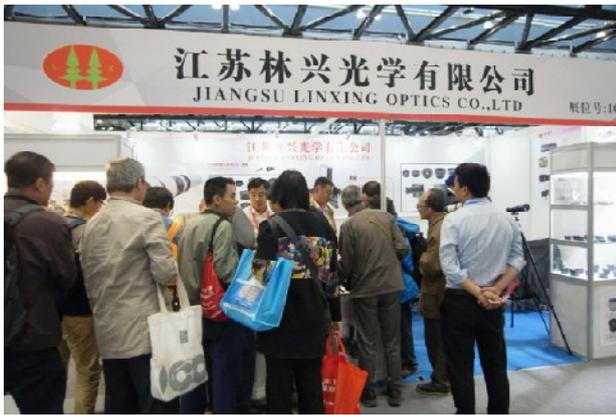
会場を歩いていると、いくつかのレンズメー
カーに行きあたることがある。とりあえずは、社
名を入れて撮影してくるよう心がけているが、
その中にいくつかの社を見つけたので簡単に紹介
しよう。さらに、詳しく知りたい方は HP で確認し

て欲しい。また、社名は繁体文字は読めなく、活
字としてもカバーできないので、漢字と英語の混
合であることも、ご容赦いただきたい。

KAPKUR と記されたショーケースに望遠レンズな
ど数本が置かれていたので、調べてみると吉林省の
長春 Richen Optronics 社であることがわかった。
ホームページによると、設立は2000年の民間企業
だそうで、光学設計技術者と機械技術者の集団で、
現在は光学設計に焦点をあてているという。ホーム
ページ (www.kapkur.com、www.richarm.com) を見る
と、香港 MEIKE デジタルテクノロジー社の交換レ
ンズのうち赤い帯のデザインされたレンズと同等な
ものが紹介されている。たぶんデザインの統一性など
を考えると Richen Optronics 社から供給されてい
ると考えるのが妥当だと思う。

ところで、Richen Optronics 社のセールスマネー
ジャー氏の名刺は写真入りで、その写真がプラク
チカの一一眼レフで、そこについている Carl Zeiss
Jena DDR の 50mm F2.8 レンズが、私の持っている
テッサー 50mm F2.8 と瓜二つなのだ。これで、かね
てから不思議に思っていた謎が解けた。

さらに長春 Kaili Optronics 社というブースを
見つけたが、こちらをホームページで詳しく調べ
てみると、フルサイズ一眼レフ用の 35mm F2、85mm
F1.8、135mm F2.8、ミラータイプの 320mm F6.3、



江蘇 Linxing Optics 社ブース。スマホ用フロントコンバージョンレンズがお得意のようだ。1996 年創業、社員 5 人



K&F CONCEPT 社。日本の CP+2017 にも出展している。マウントアダプターのメーカー。ストロボなども扱っている



Ningbo Haida 写真用品。光学フィルターを中心とする写真用品メーカー



TORIOPO 三脚と OUBAO ストロボ。三脚とストロボは最も中国企業の得意とする分野だ。どちらもアマゾンで購入できる



すでに日本でも知られた「NISI」は作例の展示とフィルター講座を開いていた。フィルターも中国の得意分野だ



一瞬カメラバックのテンバだと思ったら「TONBA」だった。カメラ用バックとして種類も豊富だ

500 mm F8、500 mm F6.3、900 mm F8、8 mm F3.5 フィッシュアイ、フルサイズ T マウントの 500 mm F6.3、500 mm F8、650 ~ 1300 mm F8-11、420 ~ 800 mm F8.3-16、APS-C 用の 6.5 mm F3.5 フィッシュアイ、変わったところではミラー式でペンタックス Q 用の 88 mm F1.8、ソニー E マウントとニコン J 用の 300 mm F6.3 など種類もさまざまだ。この中には、仕様、デザインが他社と似ているのがあり、同じなのか、異なるのかはわからない。従業員数は 500 人。

深セン Commlite Technology 社は幅広い写真用品を扱い、ホームページ (www.commlite.com) を見ると、レンズマウントアダプター、ビデオ用マ

イクロフォン、LED ライト、ストロボ用トリガー、ビデオアクセサリ、カメラホルスターなどをそろえている。このうちレンズマウントアダプターは、AF・絞り・手ブレ補正・Exifなどに連動し、ニコン AF レンズをソニー E マウントカメラへ、キヤノン EF・EF-S をソニー E へ、ニコン F からソニー E へ、ライカ M からソニー E へマクロ機構付き、キヤノン EF・EF-S から M4/3 へ (0.71×光学系入り) などがそろえられている。

まだまだコンバーターを含めた光学系を扱うメーカーはたくさんあると思われるが、ここから先は写真を主体に会場の雰囲気をお伝えする。



深セン JinJiaCheng Photography Equipment 社のブース。レンズフード、ケーブルリリース、フィルター、アイキャップ、マイクロフォンなどがある。ドイツのフォトキナや日本のCP+にも参加実績があり、すでに日本でもJJCの写真用品は販売されている (www.jjc.cc/)



リングライトの「南冠」。この時は空いていたが、モデル撮影には多くに人が集まり、アップで撮影していた



ドローンメーカーDJIのブース。DJIは中国企業だ



2015年10月に中国北京で設立された写真用品の新興企業「Joobot社」(www.joobot.com/cn)のブース。会場ではスマホWi-Fiで順次シャッターリリースできるシステムを展示



デジタル画像製品体験コーナー



中国のインクジェットペーパーメーカーFANTAC社のブース。自社ブランドのFullColors、コダックブランドなどを製造しているがここでは製品展示はなく、デジタルの国際色彩管理をアピールしていた (www.fantac.com.cn)



暗室のコーナーもある。銀塩ファンも根強いようだ



企業各社の展示のほかにも中国写真家協会の展示もある

北京撮影器材城

今回のCHINA P&Eの訪問に合わせて、「北京撮影器材城」というカメラ関係店が400軒ぐらいが集まる床面積14,800㎡のビルがあるというので、到着した木曜日の午後に出向いてみた。

場所は、北京国際空港とオリンピック記念公園からからタクシーで30分ぐらいの北京市五木果松

路40号という地域にある。

行く前には東京秋葉原のラジオデパートのようなイメージをいただいていたが、当たらずとも遠からず、といった感じであったが、さらにそれをスケールアップしたような写真機材のビルだった。

以下、写真を中心に紹介する。



撮影器材城入口。正面左にはソニー、入口上にはオリンパスの製品広告が貼られている。警備員はいるが特にチェックはない



1階はカメラ店が多い。左から、ニコン、キヤノン、オリンパス、パナソニックだが、それぞれメーカー単体で独立しているのが多く、まるで各社ショールームのようだ。この他ソニー、富士フィルム、ライカ、DJIなども個別の店舗がある



各階とも整然と店舗が並んでいる。2階、3階はブライダル用品が多く、㊸3階の通路、このような通路が2本あり、奥は深い、㊸はドレス、㊹はカツラ専門店。カメラ、レンズケース専門店やインクジェットプリント店などもあった



1階一番奥にはカメラ修理店2軒、中古カメラ店も1軒あった。ビルの2階には写真学校もある

■ CHINA P&E とその周辺

少ない滞在ではあったが、最大限現地の写真事情はキャッチしてきたつもりである。中国の写真事情に関しては、聞くと見るとでは大違いであって、写真を楽しむということでは、日本とかなり近似しながらも微妙に異なるのも事実だ。

日本のCP+がそうであるようにCHINA P&Eも主にアマチュアやプロ向けのショーである。入場者数は、初日13,000人と事務局から聞いたが、このあたりは日本と大きく変わりはないようだ。

出展に関して一部日本企業の不参加は、昨今の事情にあってはやむを得ない感じはするが、一方で、三脚メーカーのBENRO（ベンロー）やSIRUI（シルイ）、マウントアダプターのKIPON（キポン）と交換レンズIBERET（イベリット）ブランドをもつShanghai Transvision Photographicなど、いわゆる中国写真企業の老舗が、自国において不参加なのは何を意味するのだろうか。

毎年CHINA P&Eを取材してきているアジア写真ジャーナリストの柴田誠氏によると、最盛期2010年ごろの4割減ぐらいだという。このあたりはドイツ・フォトキナも同様で、毎回展示面積をわずかながら減らしている。その一方で、日本のCP+は参加企業ブースがあふれるほどで、さらにイベントスペースが市内に分散されたりと、もともと会場面積が根本的に異なるとはいえ好対照だ。

とはいえカメラの生産が最盛期の1/5という現実の前には、かつてコンパクトカメラを作っていた企業が消えてなくなってきており、その結果参加展示社の減少というのも現実だ。

そして数年来気になる部分としての中国を含めた東南アジア交換レンズメーカーの台頭だ。たとえば、中一光学は富士フィルムGFX用の65mmF1.4交換レンズをCHINA P&Eの場で発表した。また今回出展していなかったキポンは3月28日の富士GFXの発売日からわずか3日後の4月1日にはマミ

ヤ645レンズ⇒フジGFX用マウントアダプターの試作を終え、4月中には23種のマウントアダプターを完成させると発表。もちろん、中一もキポンも富士GFXを売れ筋だと独自に判断したからだろうが、そのスピードには驚くばかりだ。

そこには現代の流通も大きく影響しているだろう。かつては専門店で購入してレンズが、昨今ではネットで申し込み、決済できるようになったのも大きく影響している。実際ネット上の価格も参入社が多く、マウントアダプターの分野では日本市場では価格競争も始まっている。つまり中国メーカー同士の競争が始まったのだ。たとえば、2017CP+で日本市場に参入したK&F CONCEPT社は、マウントアダプター関連で日本で毎月1千万円、世界で年間16億円売り上げているというのだが、価格的にも既存品より安く設定して参入している。

結局、中国をカメラ製造の場としてとらえるか、人口約13億6700万人に比例した大規模市場としてとらえるかによって、日本企業のかかわり方は大きく変わってくるのではないかと考えた。

さらに同時期の4月20～23日に開かれた韓国ソウルでの「PHOTO&IMAGING 2017」、6月20～21日パシフィコ横浜での「PHOTO NEXT 2017」、7月13～16日の上海「PHOTO & IMAGING SHANGHAI 2017」などの同種の展示に加え、ラスベガスでは毎年1月に「CES」、4月の放送機器展「NAB SHOW 2017」などもある。さらにフォトキナが2019年から毎年5月開催という発表も加わった。各社とも昨今のカメラ市場の低迷ぶりに対しては、何らかの手を打たざるを得ないのではないかと思うが、写真関連企業、各国展示会場も生き残りにかけて、何らかの新しい手を打ってくるのだろう。

☆ ☆ ☆

なお今回の訪問は、カメラ映像機器工業会の調査統計作業部会（米山真一部会長）の方々の訪問に同行させていただいた行動の一部であり、この場を借りて関係各位に深く感謝する次第です。



最盛期は会場の周囲は小さいブースで埋まっていたという



開催場所のコンベンションセンターにはまだ余裕はあるが